月　刊

Mélange

Vol.113

2016.05.29

詩と評論

月刊「Mélange」 Vol.113 2016.05.29 「月刊めらんじゅ」編集部

「月刊めらんじゅ」113号　目次

詩＆俳句

苦情 ……中嶋康雄　04

海についての会話 ……月村 香　05

I miss 環句② (俳句) ……岩脇リーベル豊美　05

街の一隅に……野口 裕　06

ぎおん ……大橋愛由等　07

起源への／からの、瞑想 ……有時秀記　08

二つの易しいダンス ……高谷和幸　09

海が歩いてくる ……木澤 豊　09

見えざる手が肩に触れ……大西隆志　10

ミラクル・ボーイ…… 富 哲世　11

連載エッセイ＆詩評

ひと言詩評〈16〉……冨 哲世　03

神戸詞あしび 102「四〇〇年の時を経て二人の作家と接する」……大橋愛由等　12

編集部だより★33／去年還暦となって、映画がシルバー料金(税込1100円)で鑑賞できる特典を得てから、一カ月に1作品程度映画を観ることにしている(美術館・博物館のシルバー割引は65歳から)。今年観た映画を列挙してみよう。①マクベス」(ジャスティン・カーゼル監督)〈今年シェークスピア生誕400年にあたる〉、②「禁じられた歌声」(アブデラマン・シサコ監督、2014〈西アフリカのマリが舞台。数年前までイスラム過激派に占領され息苦しい生活を強いられる〉、③「光の墓」(アピチャポン・ウィーラセクタン監督)〈タイが舞台。寝続けている兵士と霊の交歓ができる女性が登場〉、④「マジカルガール」(カルロス・ベルムト監督、2014)〈スペインに住む日本のアニメオタクの少女は寿命はあとわずかだった〉、⑤「La Voz Dormida〜沈黙の叫び」(ベニト・サンブラノ監督、2011)〈スペイン内戦を女性の視点から描く〉――といったところである。せきを切ったように映画を観ている。おそらくこのペースはしばらく続くだろう。(大橋記)

富 哲 世

ひ と 言 詩 評　15

川口晴美 詩集『Tiger is here.』

〈心理テストです。
イメージしてください。
あなたはボートで漂流しています。
ボートには、孔雀、猿、羊、馬、虎も乗っていますが、
漂流が長引くにつれ、一匹ずつ捨てていかなくてはならなくなります。
どの順番で捨てますか。その理由も答えてください。〉

冒頭の詩にあるこのよく知られた心理テストにもあるように、それは自己存立に関わる、わたしひとりの物語の中の、とらえどころのない不安世界のなかでわたしというかたちのない存在に輪郭を与えようとする物語の、他者なき実存としてのわたしの、虎である。ここには単独者とは言わないまでも超越的なわたしが居り、これはどこにもいない〈わたしだけの虎〉をテーマにしようとしている。

もし それが単純なヒーローものなら、オレは虎だとか、虎になるんだ！　とか言ってのけるか、修業や修練の末にヒーローとなることで、こと足りるだろう。それはある物語の終わりを了解してしまっているからだ。そうでは居られないわれわれアンチヒーローたちの多くは、誰でも一度は「虎はココニイル」と言ってみたいのだ。

寄るべのない浮遊感のうちにある青春や、ライブでの熱狂の一幕の解放劇、ほどけゆく夢想や妄想の狂言的な悪夢の重なりを通してそこにかたちづくられていく超克的な「虎」の普遍的意味。しかしそれは「虎よ、虎よ」とウィリアム・ブレイクの描き出したわたしたちの彼方にある虎ではない。それはあくまでも虎の私有化、〈わたしのわたし〉としての「観念」の、謂わばわたしがわたしにとって既知であるような、あるいは周知であるはずの「虎」とのすり合わせ、の意味であるように、〝見える〟。

けれどもその「虎」の登場が幾分か強弁じみた付会ででもあるかのように、母や父や兄が語られ始めるとき(大人になってから弟に触るのは初めてだったから／ふしぎな気持ちがして／夜はひどく深い「夜を走る」より)、それへの没入は(かってストレッサーであったはずのものへの再接近であり、そのことによる〈わたし〉の「虎」を巻き込む変容と新たな統合が見いだされている。)図られたようになまなましい高まりを帯びる。近親者とはおそらく自己存立をもたらしている最大級の抑圧装置であると同時に他者との通路をひらくもっとも近道の契機を持つものだろう。それは見事に〈わたし〉の〈生ま〉の位置を照らしだしている。

この詩篇が先行するというアニメの「Tiger & Bunny」にどこまで負っているかはしらないが、おそらくはその中の主人公や登場人物たちも、傷を負うこのような隠されたヒーローのアンチヒーロー的な日々を生きているのではないだろうか。

朝目覚める、ということはその都度回想の再創造を離れて生まれ変わることかもしれない。「空っぽの血はもう外へはながれない」「からっぽのまま／くりかえし朝はくる」からっぽのわたしが、アナーキーな虎の力を借りて、経験を生きる年老いるにはまだ早い体で再生へと向かう若い体のように今を駆け抜けていこうと逸るその能動性に、その先にある少し未来を、含んだような〈虎にんげん〉としての〈今ここ〉は、この回廊くぐりの詩篇の内に再現前する回帰的経験の姿である。虎は再生や再現前のキーワードであり、そしてその「虎への道」が、結末を知り得ない「現在」へと続く以上、それは〈答えのない〉もうひとつの「リドルストーリー」(「トレスパッシング」)なのである。

ほんのすこし拒むような重みをてのひらに残してから開く扉の向こうに冷蔵されている救いは見つからない。(第二部「あける／しめる」より)

冷蔵庫をあける、しめる。これはただ「今」である。そして内を開いてみせることでもある。

溶けたべっこう飴色の日が斜めに垂れて届く食卓で、冷えて味の染みたキャベツと鶏肉の隙間からてらてら光るグリーンピースを箸でつかまえて口に運ぶ。次つぎに。つるんとした表皮を歯で破ると内部は崩れて唾液と混ざりあって落下してゆく。おだしとみりんとしょうゆとおさけが滴る記憶。体の底で連なる光の粒。眠くなる。(第二部「連」より)

これもまたただそのように継起する「今」のまんまの生活感情であり行為の姿であると同時に、包摂という受容と摂取の〈わたしであること〉の有り様である。

第二部と第一部とは、常に今が回想に先立つように謂わば読みの時間としては逆行している。二部に見える、毎日の〝しかたなさ〟という確かさのうちへ溢れこぼれようとする現在の子細、「虎」としての第一部はその上にはじめて成り立つ、そしてその照らし合わせの上に第二部は「今ここ」のラビリンスとしてであるかのように、対象自体を生き直しうるのではないだろうか。

(思潮社　2015年7月)

◆苦情

中嶋康雄

忍び寄る異郷に
苦情をブツブツ呟いている
虫眼鏡で小学生を焼いている
放棄された野原が燃えている
飛行機雲がばらけてゆく空を見上げる
スーパーで熟年夫婦が手をつないでいる
手をつないだまま食料品を万引きしている
マッチが生産を廃止される
マッチはすられ続ける
人間の仕事も減っている
透明人間が腹を空かせて泣いている
透明人間になっても
解放されるわけがない
太い蛇が死んでいる
破れた腹から人形の顔がのぞいている
「せっかく就職したのに・・・」
人形の顔が不機嫌に歪んでいる
人形が蛇から引き抜かれ
どぶに捨てられる
頭が汚泥に突き刺さる
どぶからのぞく少し消化された足がなまめかしい
なまめかしさが話題になる
泥だらけの人形が逆さのまま
ワイドショーに出演する
声が特定不能に変えられる
司会者があまりの臭さに失神する
人形が逆さのまま番組を乗っ取り進行する
もと司会者が踏み潰される
脳がはみ出てぐちゃぐちゃだ
アシスタントがすげ替えられる
次のアシスタントはプレムミュアエで
頭がなくて胸に顔がある
東方見聞録からバイトでやってくる
犬が必死で吠えている
アシスタントが恐い顔で睨みつける
吠える犬が臍から煙を出している
スポンサーが空虚な腹を叩いている
行列が行列のために
少ない仕事に並んでいる
隣で人工知能が就職にあぶれている
「透明になるしかない」
毎度毎度支給日に言い渡される
透明になる飴は
糞に塗れて落ちている
透明になっても並んでいる
ますますやつれる姿が見えない
定時がやってくる
放置されたまま門が閉じられる

◆海についての会話

月村香

彼女はわたしを見てこう語り出したわたしは生まれて初めて水着というものを知り生まれて初めてまだ三十代の父親に連れられそして初めてちょっとにごった海というものにおそるおそる入ってみるまだ三歳の女の子のように光に満ちあふれてしあわせだった髪の毛なんか海水でぐじゃぐじゃなのに髪飾りをたくさんつけてもらって砂を歩きづらそうにしたりうきわをとりに行ったり君詩が書けなくなるときがあるだろうあまりの幸福さに絶句して気が狂うことだってあるだろうそして現在の心の乱れをとるために思い出すのをやめるのだ光を覚えなくするのだそれでも思い出すとき神に与えられたひとつひとつを消してゆく未熟というものは幼年期のことではないのか

◆I miss 環句 ②

岩脇リーベル豊美

手繰るペットボトルの影に月光を見つける
十三夜の月に裸足で卦躓くと痛み
旧米軍基地の空き地に雛菊敷き詰めバンビ生む
夜明けまえパーカーの難民と出くわし蜻蛉になる
氷聖の宮廷に咲かぬ真白き聖霊降臨薔薇
放射性物質を投与するための針を抜かれる淫靡
マネキン・ピスの性器が反りかえりビール栓を抜く
天竺の人のひと束のコリアンダー秤に載る
野生動物の動線をたどるときみのところ

◆街の一隅に

野口 裕

エレベーターの前
椅子に腰おろし
カバンを抱き枕にして
カバンの縁にハンカチを乗せ
あごを乗せ

いろいろあるだろうが
よだれ垂らして心地よげに
眠る男の
向かいの鏡にもうひとり映り
同じく眠る

夢の源泉はこんこんと湧き
偽の源泉またこんこんと湧く

予期せぬ仕儀にて
私は
葬儀におもむく途中の
エレベーター待ち

扉開けば
もうひとつの鏡は
夢をさらに膨らませてくれるはず

神が死んだとてわめき散らさず
神あるがごとく振る舞うことに慣れてしまった身に
この男はひょっとして
新しき教祖かと
一瞬妄想がよぎり
エレベーターが来る前に
声を献げる

もしもし
財布が落ちていますよ

◆ぎおん

大橋愛由等

みつめられるのはきらい
(ふけゆく都心の夜は果てのない吸水紙。ひとひとをどこかに吸着していく。そのどこかを知っているのは道化(ピエロ)。瞼をもたない魚類の真似をして夜の使徒をきどる。睡眠障害のボクは光源に寄り添い坂をのぼろうとすると道化の笑いを受ける。「この街にはメタファーが不足しているから」。彷徨うふりをして一冊の本になろうとしているボク。「翻訳者はつまずきながらやってくる長く黒い髪のおんなだろ」。ひらかなの生き方を伝授してくれそうな鳥は夜に飛来しない。「かたわれをなくしたヒヨドリは雄弁だって知ってるくせに」。ひたひたと奔走しようとするボク。朝がくるまでなんどか壊れた腕時計をみるだろう。「夜がすべてだ。すべての眠る者から夢を剥奪したい」。ずっと待ち構えていたヤママユガがボクたちの交差を聴いていて。

いたいと言ったよねいま
(朝の二重奏は漂白した緑だと想っていた。ヤママユガは約束どおり夕焼けの時刻にやってきてぼくを見つめる。「ズッキーニは一本の誠実であろう」。にがい紅茶には昨日のウソがよく似合う。「具象はね、正八面体の貌を演じているつもりなんだよ」。白い壁にかこまれた部屋にぼくはいる。どこかからか火曜日に疾走した春椿がその部屋に入ろうとしてるのに気づく。「解体のあとに支払う理性はけっして安価ではないとおもうのだが」。気弱なぼくはヤママユガに同意を得たくて、抜けるような恩寵の空をあおぐ。「もどってこないよ、いつまで待っても、」。さぶまりんは港内では浮上しながら航行するんです。還ってこないかもしれない。風をときほぐすときっとわかる。なにがわかる。翻訳者は知っているふりをするだろう。

とける椅子に身をゆだね
(かゆみがとれずに昼下がりを生きる僕は鍵つきのぶっくかばーを持ちながら言う。「紫陽花の葉脈にはふたつの数式」。道化はしゃがんだまま初めて訪れた風と塩が毎日あらがっている町のことを語り始めようとしていた。「銀色の薄膜のむこうに万物という虫が跋扈している」。僕は遮るつもりはなく風速計を翻訳者に向けてかざそうとしていた。昼が自分に自信をなくして路傍に座りこんでいる。もうすぐズッキーニを毎日一本たべる家の額紫陽花が咲く。「今晩の舞台で道化のウソをきずかないふりをするのがヤママユガだ」。おとついマグカップに白耳義麦酒を入れすぎて溢れた泡が第二幕第三場の台詞となって僕の前に立ちはだかる。列柱の後ろに隠れていたい者たちに告げよう。正八面体には気をつけろ。全ては三拍子になりはてる。

◆起源への／からの、瞑想

有時秀記

人類学者ダートの背後の目になって、時の痕跡を逆流すると、波動は目に見えないが、感ずることができる。呪師が古い「時」の波動を感じる淵源は、出アフリカの遥か前だ。七百万年前にアフリカの大地に眠っていたタウングスチャイルドの身ぶりの想念が呪師の深い心奥になにものかをもたらす。

悠久の昔、超古代夜の空洞で呼吸していたタウングスベイビーが呪師の瞑想を掻き立てる。たとえ有節言語を発声していなかったにしても、たとえ単純な身ぶりと唸り、泣き、叫びによって意志を伝えていただけであったとしても、呪師の瞑想の心奥になにか得体の知れない親愛と寂寥の堆積がえんえんと続くのである。

呪師の瞑想の往路に浮かぶのは、タウングスチャイルドの頭蓋であり、手足であり、胴体や背である。そのような形態であり、親しき者に何かを伝えようとする、その身ぶり手ぶりだ。逆に、そこからの、瞑想の復路からの、呪師の呪(じゅ)は空漠たる寂寥を超えた波の「燃える」である。呪師の心奥は、存在の深奥へ続く道を行くもののごとく、砂の霧の中で道なき道を、超古代夜からの痕跡を今ここに至るまでたどりながら、深奥に響く音と、深奥を描く色彩画と、深奥に応答する有節言語へと立ちもどってくる。

有節言語の構築する伽藍は、多様な色彩と打ち震えるような音楽と、想像のもたらす形態の相乗性によって、崇高性を志向することが可能だが、それには何かしら欠けてはならないものがあるだろう。その欠落はタウングスベイビーが短い記憶の中に浮かべたかもしれない「希求」に依拠していると呪師は沈黙をもって語る。

知っているか？　ホモサピエンスベイビー。　沈黙の呪師がみずからの有節言語で構築する伽藍を。交響曲のような伽藍の中に燃える鳥が潜んでいるのを。鳥の声が聴こえないにもかかわらず、それはこの世の最後に奏でられる美しい音楽のようであるのを。呪師とともに沈黙を聴くことができるならば、知ることができるだろう。

ホモサピエンスベイビー、超古代夜の空洞に耳を澄ませよ。新たなる伝承に耳を傾けよ。瞑想の中で古代夜の伝承が語り出すまで。数々の歴史と悲嘆と迫害をくぐり抜けた古代伝承が瞑想の耳に届くとき、そのとき、確かに有節言語の伽藍の構築は実現するであろうか。

◆二つの易しいダンス

高谷和幸

「ベール」におおわれて　ふくまれると火
とケムリの半透明を見ていた　「黒い鉄
橋のうえ」　には水以外に何もないわた
しの　うしろに人影が走る　ばっさりと
身体(風景)から切り落とされた　口があ
る　動物のミメーシスが繰りかえされた
なぎたおす(《白》と《黒》のように)　大
きな岩を動かそうとして　わたしら…よ
りも　「あなたの眼を劇場に」　こえ(そ
の記述性)の細胞の一つ一つを紐でつな
ぐように(はじまる)　傾斜面に一片の骨
(＝深層筋)が　結束点のある「ベール」を
施されて　動こうとしていた(…と、すで
にともなった)　二つの易しいダンス

わたしがいても
　　や
しゅるっと消える
　　フナムシは　どこへ行く
　　のだろう
ぼくが生まれたときからどんどんどん　鳴
　っている
波はどこに行くのか　じつは
わたしのほうが　どこへいくのか
それぜんぶ　わからない　みんな同時に
どこかで起こっているのだから
きょうもあしたも
　　つけくわえるものは何
　もない
ごろ石の海岸の刃物のような草が
揺れたり光ったりしているとき

◆海が歩いてくる

木澤豊

団地の外れの空き地でも奴らはあやしく
　ぎしぎしと
光って　揺れてたりしたんだから　おなじ
　ときに　な
はっ　そうか　おなじときなのか
あちこち　さまよってるのか　そうなのか
草っ原の　見えない突堤から
取り戻したような　逃がしたような
野放図な庭を遥かに望めば
向こうは　それは八十年前のわたしという
　ことか
海が　歩いてくる
足の裏がじゃりじゃり痛いけれど
わたしは　すでに　いないようだ
じゃ　だれが　言った
言わない　言わない

◆見えざる手が肩に触れ

大西隆志

快晴、陽射しはちょぴり邪魔だが
吹き抜けていく微風は気持ちがいい
プリーモ・レーヴィの『アウシュヴィッツは終わらない』を読んでいる
ボリュームたっぷりのラーメン屋の日替り昼定食を目の前にして
飢えの記述を読んでいる、野獣のごときパンとスープへの執着

安全な場所での読書
原題の意味は「これが人間か」、ぼくも人間に慣れないでニホン語を打っている
書くのでも、記憶するのでもなく、パネルを叩いている
今しがた、飛行機雲が浮き出たのに音が聞こえない
収容所も、刑務所の記憶もないのだが

一斉に緑濃くなる季節を前に
小皿にキムチを盛り、食べ放題なので何度となく箸を動かせている
ヒトはあたらしい事態にどう耐えるのだろう
思想はみずからの意図を天体図の軌道に描かれないで
繁茂する現実の圧倒の庭に墜落していく

トカトントン、白昼の小径に、両脇の麦畑は渦巻き
先に歩きたいのに時間の壁に沿ってしまう
百年前のやり過ごし、八十年前の視線
気象の轍にこぼれていった血痕と影について
腹が膨れないでいるぼくらがいて

言葉になる前の吃音のように何かを叩く音
旋律は流れているからなのか、習慣を崩していくようだ
疑うべきなのか、感覚さえもトラックのラインのように引かれ
テーブルに盛られているのは白紙の紙屑
何もなかったかのように食事を終えてしまう

◆ミラクル・ボーイ

富　哲世

〈ミラクル・ボーイ〉は
(おんなであることを隠して)
四隅の丸い(日の丸)電車のドアの窓から
初夏の谷の
滴るみどりを眺めていた
ふっと目を逸らせば木葉に繁茂の隠された
きのうやまだ見ぬあしたが山のかたちに待
ってくれているような気がして
おもちゃの世界で始まらない歌や終わらな
い物語を
この横揺れのおばちゃんのようにいつまで
も抱きながら、
ああ、自分は遅れているのかな、という気が
した。
家族とライオン
覆われているもの
それが届かないものに差しのべられた
のべつ幕ないボクらの生きる重みだとすれば
子供たちの手をはなさないで
秘密の家をはなさないで
子供たちは溺れるのがとても上手いから
黄色い声もどこからともなく届けられる
モスグリーンのシートの
あの岸辺の沈黙から

階段の途中で
チラシのめぐる
エスカレーターの涼しい木陰で
すき間に注意して
ゆっくり歩くワニのスイッチをいれる

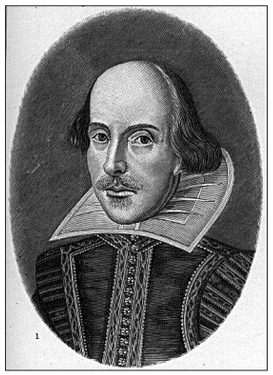
空の湖の上を雲をかすめて飛ぶ見間違いの
影を見て
人であることにしこたま笑いこけたあと
ぼくはやっぱりなにものでもないと駅が近
づくのが待ちどおしかった。
そのときが来たら
千切れた手足を拾い集めて
なんとか自分をたもとうとして
その軽さゆえに
自分が時代であることだけを知っていて
レキシの前ではそれを見失って立ち止まっ
ている

〈ミラクル・ボーイ〉
彼方からやってくる
まひるまの漏出。
知られざるものとして
印象の澱みのなかから折り畳まれた時間を
釣り上げ
木魚打ち
耳にはキラキラまわるスプーンの疑似餌を
闇の前にちらつかせては
エーと唸る腹話術師を真似て
この扉を開く軋みの鍵をひとまずあずけ
る。
天井から逆さまに垂れてくる得体のしれな
い顔に融ける指の火を向け
それから
自分にさわり　なぞれない
自分のかたちを夢見る。
振り向いて
大急ぎで仕事を片づけなければ
頭のうしろの峠では寒い林檎のように雨は
あてどなくあなたを濡らし
ぐるぐるぐると喉をかすめてふれゆくものに
車内はいつも
一歩手前だ。

神戸詞（うた）あしび

102-2016.05.29 大橋愛由等

四〇〇年 二人の作家と接する



シェークスピア

今年没後四〇〇年を迎える作家が二人いる。スペインのセルバンテス（一五四七年生まれ）とイギリスのシェークスピア（一五六四年生まれ）。ふたりとも一六一六年四月二三日に死去している。ただし当時のスペイン（ユリウス暦）とイギリス（グレゴリオ暦）が採用する暦が異なっていたために厳密には同日ではない。が、両国を代表する文学者が同じような時期に死去したことは事実である。

スペインでは去年セルバンテス著『ドン・キホーテ』後篇が出版されてちょうど四〇〇年だったために、スペイン関係者では『ドン・キホーテ』を語るキッカケとなったようだ。

一方のイギリスでは、スペインよりはるかに多角的、大規模にシェークスピア没後四〇〇年を祝っているように思われる。

わたしは少年時代から戯曲をよく読んできた。これは映画のシナリオを書いていた父の血をひいているのかもしれない。対話（会話）によって構成されている物語を読むことでエクリチュールの立体性を感じ取ろうとしていたのかもしれない。大学生の頃は、ギリシア悲劇をときあらば読んでいたし、働き出してからは近松門左衛門の現代語対訳の文庫本を座右の書としていた。

せっかく四〇〇年という記念すべき年なので、このセルバンテスとシェークスピアの作品を読もうと思いたった。セルバンテスは長編小説『ドン・キホーテ』を読破すればいいのだが、シェークスピア作品は多い。かつて蜷川幸雄演出の歌舞伎で観た『十二夜』と、翻案された映画が魅力だった『テンペスト』を読んだぐらいで、読書量が限られている。

そんな折に、友人からアマゾンでシェークスピア映画全集DVD10枚入りの格安料金セットが売りにだされていることを知らされ、さっそくその日にうちに購入。その10作品を映画でみる前に、まず文庫で読んでからDVDを観ることにしようと決意した。この試みがうまくいけば、一挙にシェークスピア作品を身近に感じることになるだろう。

まず挑戦したのが、『マクベス』。この作品は魔女たちをどのように描くかに注目してみた（魔女が殆ど出てこない構成もあるようだ）。魔女たちの預言的な言辞をきいてしまったことで、自分の行末を決定してしまうマクベス。魔女たちはほんとうは実在したのではなく、マクベスの願望が産み出す幻想なのかもしれなかった。破綻へとすすむ速度ははやまりこそすれ、とまることはありえない。奈落の底に堕ちていくばかりの人間の救いのなさが痛々しい。

つづいて手にとったのは、『リア王』。これは道化をどのように登場させ活躍させるかが興味をひくところである。この作品には道化（フール）が重要な役割を果たしている。その道化は自ら狂人を演じることで謀反の疑いの対象者となることを忌避しようとした者である。長女・次女に愛想を尽かされて嵐の夜を彷徨う羽目となったリア王はこの者を「ギリシア学者」と命じて、道化が発する言辞とはまた違う角度から、世の道理を確認するのである。

購入した10枚組DVDは著作権がきれた一九四〇～五〇年代の作品で構成され、モノクロ映画がほとんどである。シェークスピアの演劇台本をそのまま一本の映画で表現するととても二時間程度では収まらないので、映画はどうしても翻案・編集されるし、どのように翻案・編集するかが、映画監督の腕の見せどころなのである。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.113
神戸

2016年05月29日　通巻113号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等（「Mélange」同人）
maroad66454@gmail.com
定価600円(税込)